

CLC からしだね書店便り

2025 February

no.50

2

* 今月のご案内 *

- ① 新連載「歴史と対話し歴史に学ぶ」第2回
- ② 古書コーナーのご案内
- ③ LGBTQをめぐる「聖書」の読み方について
『舟の右側』2025年2月号を読んで思うこと
- ④ 名著紹介
『スピノザ』『神学・政治論』と漫画『鬼滅の刃』
- ④ 書店員のちょっと気になっていること『rightの理想』

CLCからしだね書店では…

- ① キリスト教書だけでなく、福祉、心理、精神、哲学、児童書、その他一般の良書もそろえています。
- ② お洒落でかわいい雑貨や小物もあります。
- ③ ブックカフェとして、ドリンクやスイーツ、ランチも提供しています。ゆっくり本を読みながら、お過ごしください。
- ④ コーヒーを飲みにきてくださるだけでもけっこうです。ドリンクを片手に、本をお楽しみください。
- ⑤ 古書のコーナーもあります。ほりだしものあります。
- ⑥ 読書会や著者を招いての講演会など、人と人が出会い、つながる「対話」の場を提供します。



CLC からしだね書店 & カフェ トライアングル
営業時間 11:00-17:00
定休日 日曜日と年末年始（※祝日も営業）
毎月第3木曜日は書店のみ営業

る方法を教えてくれました。それを今回試してみました。根っこはパソコン派です。先ほど紹介した本を理解するには、予備知識が必要です。高校の世界史の授業はまだ大航海時代までですんでいないと思うので、『インディアス史』の背景を少し説明しておきます。一四九一年、ジェノバ出身のコロンブスは、イサベル女王の援助を得て大西洋を航海し、バハマ諸島のサンサルバドル島に到着します。彼は「インド」に到着したと考えていたので、その地をスペイン語でインディアス、先住民をインディオと呼んでいました。その後、スペインは中南米に植民活動を行っていきます。手元にある『山川詳説世界史』(二〇二三年)には、「エンコンミエンダ制が導入されたスペインの植民地では、職業者ラスカサスのように、先住民の救済につとめた人物も一部には存在したが、多くの場合、抵抗を続ける先住民を植民者が労働力として酷使した」と書かれています。一五二二年コルテスによるアステカ王国征服や、三三年のピサロによるインカ帝国征服が



▲バルトロメ・デ・ラス・カサス (1484 ~ 1566年) https://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/b/b9/Fray_Bartolom%C3%A9_de_las_Casas.jpg?uselang=ja

有名ですが、スペインは一五二一年にはキューバ島(スペイン語でクバ島征服を始めていました。問題のエピソードはこのときキューバで起こったことです。おじさんが紹介してくれた箇所を読みました。首長の名前はアトウエーイ。友人が言ったように、彼は「天国に行くことを望まない。なぜなら、キリスト教徒たちがそこへ行き、そこに居るからだ」と言っており、火あぶりの刑に処せられた、と書いてありました。彼はインディオの間に人望があり、すぐれた洞察力をもっていて、スペイン人の神は黄金で、それを手に入れるため、自分たちに冷酷無情なんだと仲間話っています。

有..

スペインの征服者達はインディオを見つけると虐殺するとともに、残った人々を奴隷として分配し、スペイン人の間で、『自分のところにはいま何匹しかいないが、どうしても何匹は使う必要がある』というふうになり、インディオのことをまるで家畜と同様に話すのであった。という箇所を読んだときは、びっくりしました。ラス・カサスは、このスペインの行為を強く批判していることが伝わってきます。ラス・カサスがどんな人か、とても興味が出てきました。彼は何故『インディアス史』を書いたのですか。

はじめ..

それをこれからいっしょに探っていきましょう。彼の父はコロンブスの第二回航海(一四九三年)に加わっています。彼自身は一五〇二年に一八才で初めてインディ

連載第二回

『スペインによるインディアス植民地化とキリスト教(上)』



今回と次回がスペインによるインディアス植民地化とキリスト教との係わりについて考えます。今回は、高校一年生の甥森下有一が素朴ながら歴史的事実と接近していく過程と、スペイン植民の残酷さとキリスト教もそれに関わっていたことを扱っています。今回は、インディオ奴隷化に反対したラス・カサスとそれを肯定したセブールベダ、及び国際法的発想を導入したヒトリアの論争を中心に、キリスト教宣教のあり方と事実認識の重要性について考えます。叔父山田はじめ(三六才)とその姉森下晴子(四一才)の関係も、徐々に明らかになっていきます。



有..

おじさん、最近ちょっとショックなことがありました。先日、一六世紀にスペインがインディオ(中南米先住民)に対して行った非道に関連して、友人が次のようなエピソードを話してくれました。インディオのある首長がスペイン軍に捕らえられて処刑される寸前、キリスト教に改宗すれば天国に行けるとすすめられたが、天国にはキリスト教徒がいると聞いて、キリスト教徒になることを拒否した、というのです。インディオたちはキリスト教徒のスペイン植民者たちからひどい扱いを受けていたからです。このことを家で夕食の時に話したら、母はほかに「おじさん、おじさんに聞いてみたら」と言いました。それで、これは本当にあったことなのか、知りたくて、メールをしました。

はじめ..

姉さんがそう言ったんですか。フレイクニユースがはびこる中、歴史学的なアプローチがいつそう大切な時代になっている、と僕は思っています。このエピソードについて、二人で検討してみました。

う。二つのことが大切です。そのエピソードの出典は何か。そして、それを書いたのは誰か、という点です。

このエピソードは、ラス・カサスという人が書いた『インディアス史』という本に出て来ます。この本は幸い日本語に訳されています。岩波書店の大航海時代叢書に収められていて、一巻が七〇〇頁ほどで五巻からなる大著です。著者はもちろん凄いです。訳者の長南美氏も凄いなと思います。現在は、それを一部圧縮して岩波文庫で七冊にまとめられています。このエピソードは原著の第三巻の二五章文庫版第五分冊に出て来ます。有ちゃん、図書館で借りて、がんばって読んでみてください。

有..

今度の連休中に読んでみます。ところで、僕はメールで送ったのに、おじさんがラインで返事してきたので、びっくりしました。ライン派に変更したのですか？

はじめ..

最近、塾の学生さんが、パソコンからラインに文章を送

アスに渡っています。その後司祭となり、エンコミエンダも所有しています。これはスペイン独特の制度で、ポルトガルは露骨に奴隷制を推し進めますが、イサベル女王が躊躇したため、先住民の保護とキリスト教化を条件に、植民者に先住民とその土地の支配を委託するという巧妙な奴隷制です。キューバ征服には、アトウエイの処刑後、一五二二年から従軍司祭として参加します。この時、彼はインディオの悲惨な状況をつぶさに知るようになります。一五二四年に彼は自らの非を認め、エンコミエンダ制を非難します。『インディアス史』を実際に書き始めるのは一五五一年、十年後に書き終わります。この間、スペインでは植民地化をめぐってどのような議論があったのかを整理しながら、ラス・カサスの立ち位置を探っていきます。有ちゃんは、すぐれた伝記(梁田秀隆『ラス・カサス 人と思想』清水書院)を是非読んで下さい。

中谷博幸(なかにひろゆき)

1953年奈良県生まれ。1981年京都大学大学院文学研究科博士課程(西洋史学専攻)単位取得退学。現在香川大学名誉教授。大学生の時KGGを通じて信仰に導かれる。主な研究対象はヨーロッパ文化史、特に宗教改革や敬虔主義などドイツ近世キリスト教文化。好きな芸術家は、モーツァルト、リーメンシュナイダー、ドストエフスキーなど。主な著書『マルティン・ルターとその世界』(美巧社、2016年)、『キリスト教と歴史のアウトサイダー』(山中淑江と共訳、昭和堂、2001年)。

有..

まず興味湧いてきたので、読んでみます。ところで、母がはにかみながら「おじさんに聞いたら」と言っただけ、何故なのでしょう。

はじめ..

実は、僕が高校生のとき、姉さんに同じことを聞いたんです。その時姉さんは大学生で、ラス・カサスなどについて教えてくれました。

有..

そっなのか。僕は大学生頃の母を全然知りません。是非聞きたいです。



古書コーナーを ご存知ですか

編集後記にもありますが、リーズナブル!という、金銭的だけでない価値がたくさんあります。会員登録が必要ですが、煩雑な手続きなく無料ですぐにご利用いただけます。是非一度気になった方は、ご登録・ご利用ください。地下フロアのご利用もできます。





『舟の右側』2025年2月号
VOL.134(地引網出版)



の特集を読んで

特集 「LGBTQと聖書解釈」

- ◎高橋秀典氏：藤本満著『LGBTQ 聖書はそう言っているのか?』を読んだ
- ◎水草修治氏：『LGBTQ 聖書はそう言っているのか?』における聖書解釈の方法
- ◎岡谷和作氏：『LGBTQ 聖書はそう言っているのか?』建設的対話を求めて

一冊の本が日本のキリスト教会に、特に福音派内に大きな波紋をもたらしている。インマヌエル高津キリスト教会の牧師を務める藤本満氏が書いた『LGBTQ 聖書はそう言っているのか?』（イクスプレスブックス 2024年）である。本書は、その結論として、真実な愛に基づく同性愛であるならば、彼ら・彼女らの「結婚」も認めるべきだとし、その同性愛行為についても肯定的に書く。そして、これまで同性愛行為を否定しているとして捉えられてきたローマ人への手紙1章26―27節などの聖書箇所を丁寧に釈義・解釈し、従来とは異なる結論を導き出している。今回の特集では、福音派の三人の方に、その応答を書いていただいた。LGBTQに関して聖書は何と言っているのか、それを共に考えてみたい。

(P4)

「このような書き出しのもと、LGBTQをめぐる「聖書」の読み方について、月刊誌『舟の右側』で特集を組まれたことに、私はとても安堵しました。なせなら、LGBTQをめぐることは、しばしばSNSを中心に感情的なやりとりが展開されてきたからです。理性的・建設的なやりとりもあったとは思いますが、自分にとって共感できない主張を持つ人に対して、その働きや人格まで否定し傷つけるような攻撃的な言葉もありました。そこにはまず、対話の前提がありません。

一方、ネットの外でのキリスト教会、特に福音派の教会の中では、LGBTQにまつわる様々な課題について「いったいどうすればいいんだろう?」というところで停止しているように感じます。教会内での混乱や分裂を避けたいという思いもあるでしょうし、LGBTQのことに全く無関心な教会とクリスチャンも多いのかもしれませんが、そんな教会の状況が、多くのノンクリスチャンの目にとつ映っているのだろうか?ということも気になるところです。

いずれにせよ、「聖書に聴く」ことの上に自分の信仰を築くとする福音派のクリスチャンは、この時代だからこそ、人の「心」さて、CLCからしだね書店は、おもに精神障がいを持つ人達の就労支援の場として、キリスト教書店を運営しています。利用者のほとんどが、クリスチャンではありません。職員もまた半数はクリスチャンではありません。クリスチャンの職員は、クリスチャンではない人達の思いや考えに触れ、言葉を交わしながら、自らの信仰を深めたいと願っています。そしてそれは、私達の強みだと自負しています。聖書に書かれている「罪」とはどのようなことなのか? 「福音」とは何か? 良くも悪くも暮らしている現場から教えられることがたくさんあります。

と「体」と「たましい」についての深い問いかけに、応答していかねばならないと思います。

『舟の右側』では、3名の方が、それぞれの考えを記してくださいました。同じ福音派と言っても、藤本氏を含めて4名が4名とも同じ考えではありません。でも、聖書に基づいた根拠をていねいに示しながら、相手をリスベクトする姿勢を崩さず、肯定できるところは肯定し、最終的に結論が異なる相手の主張を聴くという姿勢を貫いておられるところに、それぞれの方の品格と誇りを感じました。

ですが、これらの誠実なお考えを読み終えて、では、牧師でもなく、神学者でもない一般の信徒は、これからどうすればよいのだろうか?と判断すればよいのだろうか?とも思いました。

「LGBTQについて、牧師さんはこれから、所属する教会や教会の信徒に向けて、どんなメッセージを送られるのでしょうか?」「私の聖書的な見解が正しいのです。だから、それを信じて従ってください」とおっしゃるのか?それとも「いろいろな考え方があります。私は考えるためのたくさん情報を提供します。あなたがあなた自身で考えてください」とおっしゃるのか?「私にも、まだわからないことが多いのです。一緒に考えましょう」とおっしゃるのか?」

ですから、キリスト教会が直面するLGBTQについての課題も、仮に「神学がわかり、聖書の読み方がわかれば」すっきり解決するとは全く思えないのです。一人ひとりみんな違う生い立ち、暮らし向き、人間関係などがあり、そこから神様に教えていただくことはまた、それぞれ違います。聖書を真摯に専門的に学んでおられる方々の様々な見解を参考にしながら、私が私の生きている場所で与えられた気づきや疑問、祈り、思いめぐらしを深めていく、何より私の隣りで暮らしているはずの当事者やそのご家族の思いに心を寄せていく…。一人のクリスチャンとしての「自立」こそが、LGBTQのことを考える上で、次の課題であるように私は思っています。

(店長 茂)

【名著紹介…スピノザ『神学・政治論』と漫画『鬼滅の刃』】

坂岡 大路

『神学・政治論』（吉田暲彦訳・光文社古典新訳文庫）の著者、スピノザは、17世紀のオランダを生まれたユダヤ家庭出身の哲学者です。スピノザの代表作としては『エチカ』という、とても抽象的な本が有名です。そのため、彼は長い間、「観念の世界に遊ぶ脱俗の哲学者」のようなイメージを持たれていました。

しかし、実際の彼は、生々しい社会問題や政治問題にきちんと向き合い、考え抜いていた人でした。内向的な神秘主義者ではなく、時代と格闘した人だったので。

出版したらまず間違いなく当局から目を付けられるであろうこの本を、そこわかかっていて出版しました。命がけでした。そんなヤバい時代を生きていたのに、彼の思想には、どこか樂觀的な空気が漂っています。いや、ただの樂觀主義ではなく、非常に「強靱な」樂觀主義なのです。

彼の自由論の本質を私なりにかみ砕いて言ってみよう。

「あなたの存在を拘束し、縛り、規定している『得体のしれないナニカ』の本質をきちんと認識せよ。そして、それを自分の力として利用せよ。その時、あなたは本当に自由である」……。

「これって何かに似ているな」と思った時に、漫画『鬼滅の刃』が思い浮かびました。アニメ版のオープニング曲の歌詞には、こんなフレーズがあります。

「強くなれる理由を知った」

「誰かのために強くなれるなら ありがとう悲しみよ」

『鬼滅の刃』は、「鬼」に家族を惨殺された主人公が、妹を鬼から人間に戻そうとして闘い、成長する物語です。この物語は、主人公に癒えようのない深い傷（トラウマ）を刻印するところから始まります。（ちなみにアニメ版のオープニング曲は「ありがとう悲しみよ」ではなく、「何度でも立ち上がれ」になっています。主人公の心情的に、いきなり「ありがとう」とは言えないだろう、という配慮のようです。納得。）

フランスの作家、ルノワールは、スピノザのことを「傷を負った男」と呼んでいます（『スピノザ よく生きるための哲学』）。彼は共同体から宗教を強制されることに反発し、ユダヤ人社会からもキリスト教社会からも疎外されていました。仲間外れにされるだけならまだしも、ナイフで刺し殺されそ

うになったこともあったようです。スピノザの友達も、「反宗教的な本を書いた」という理由で投獄され、殺されていました。当時の人々は、「自分と信仰が違つ」という理由だけで人をリンチし、惨殺していたのです。異端審問や魔女裁判も盛んに行われていました。そういう人たちのことを、スピノザは「野蛮人」と呼んでいます。スピノザの時代にも「鬼」がいたので、人を「鬼」に変えるもの。それは、「絶対真理主義」という病です。自分が信じていることは「絶対的な真理」であり、「真理」に賛同しない人間は「異端者」だから殺すべきである。そういう考えを持った人がたくさんいました。

スピノザは、人間を鬼に変えるウィルスの解毒薬を作ろうとして、本を書きました。それが『神学・政治論』です。スピノザは、「愛する者は神を知る」という「ヨハネの手紙」の一節を旗印に、「愛や平和を謳っているキリスト教徒が、憎み差別し、殺し合っている。言っていることとやっていることがちがうじゃないか。真の信仰者であれば愛を実践するはずだ」と主張します。しかし、この本の意味は当時まったく理解されず、政府から禁書扱いにされてしまいました。

『鬼滅の刃』は、すべての鬼を人間に戻そうとする物語ではありません。むしろ、辛うじて人間に戻れそつなのは妹だけで

それ以外の鬼とは闘うしかない、ということになっています。スピノザも同じ考えで、『神学・政治論』は、「不信仰」というレッテルに脅迫されていなければ、本来もつと自由にものを考えられているはずの人に向けて書かれています（序文）。残念ながら、もう手遅れ、間に合わない、というケースは儼然として存在するのです。この本を読むと、スピノザが徹頭徹尾リアリストであることがわかります。リアルな過酷さを認識したうえで、将来の希望に賭けたのでしょ。

今、スピノザは世界中で再評価されています。現代の状況を彼が見ていたら、「ありがとう、悲しみよ」と言ったのか。それとも、激しい分断と紛争が嵐のように巻き起こっている現状を見て、「昔も今も変わらない」と思っのか。夢想してまいります。

さかおか おおじ

1988年京都市生まれ。北海道大学大学院教育実践院臨床心理学講座修士課程修了。札幌市内の児童精神科で臨床心理士として勤務。オンラインや地域で子ども、若者と共に哲学対話を行う活動に取り組む。

「権利」という言葉は、英語の right やドイツ語の Recht の訳語です。この言葉は幕末の日本にはなかったため、当時の蘭学者たちは、オランダ語の recht を翻訳するのに大変苦労したそうです。その後、明治時代の法律に「権利」の語が用いられるようになり、それが定着しました。

ある辞書によると、「権利」とは、「物事を自由に行なったり、他人に対して当然主張し要求することのできる資格」とか、「自己のために一定の利益を主張したり、これを受けたりすることのできる法律上の力」(『日本国語大辞典』)を意味する言葉なのだそうです。これらの定義から、権利には「利益」や「力」といった性質があることが分かります。「権」という漢字は「力」を、「利」という漢字は「利益」を意味しますから、この辞書の定義は漢字の意味に忠実だと言えるでしょう。また、「資格」や「力」による裏付けは、他人から邪魔されずに何かをできるという意味での自由をもたらしません。その意味で、「権利」は「自由」とも関わります。

それでは、「権利」に対応する元の言葉にはどんな意味があるのでしょうか。先ほども書いたように、「権利」は英語の right や、ドイツ語の Recht の訳語として導入された言葉です。実はこれらの言葉には、翻訳の過

程で日本語の「権利」からは抜け落ちてしまった、きわめて重要な意味があります。そう、「正しい」という意味です。

例えば、私が書いた本が他の誰かに無断で印刷・販売されていたら、私はその人に抗議するでしょう。なぜ抗議するのかというと、私だけが排他的に利用することのできるものを他の人が無断で利用するのは、正しくないことだからです。そこで私は、抗議や訴訟などの手段を通して、正しい状態・あるべき状態(「私の書いた本が、私の許可なく他人に利用されない」)を回復するよう努めます。このように、「正しい状態」・「あるべき状態」は、それを実現する力を人に与えます。その力こそが「権利」なのです。

ここに、right が「正しい」と「権利」という二つの意味を持っていることの意義深さがあります。right の一語には、「正しいことは実現されるべきである」という信念が込められているのです。そんな風に考えると、なんだか right という言葉が崇高なものに思えてきませんか？ 19世紀ドイツの法学者イエーリングは、自分の権利のために闘うことの意義に関して、以下のように情熱的に述べています。

ベストセラーの海賊版が堂々と売られる、なんてことはない：はずです。なぜならこの国の人々は、「次元の低い利己主義」からはすでに脱して、「健全な権利感覚」を持っているのですから…。(書店員G)

この理想主義こそ、健全な権利感覚にはほかならない。だからこそ、人間をもつば次元の低い利己主義と打算の世界に向かわせるかに見える権利というものが、他方では人間を理念の高みに向かわせもするのであり、そこでは人間はかつて学んだすべての屁理窟と打算を忘れ、普段ならすべてを測る効用の尺度を忘れて、ひたすら理想をめざすのである。

(『権利のための闘争』岩波文庫、72・73頁)

翻って、日本語の「権利」にこつこつと気高さがあるかと考えると、少し怪しくなってきました。やはり「力」と「利益」だけでは、人の尊敬を集めるのは難しいようです。

ちなみに福沢諭吉は、『学問のすゝめ』の中で、right の訳語として「権理」や「権義」という語を用いました。「理」や「義」が right の「正しさ」という側面を表現している点で、より適切な訳語であると私は思います。

その福沢によると、当時、『学問のすゝめ』の海賊版が流通していたそうです。しかもその数が「十数万なるべし」というのですから、当時の著作権に関わる意識がどの程度であったかがうかがわれます。現在では

1 川島武宣『日本人の法意識』岩波新書 Kindle 版
2 とはいえ、「正しいことって一体何なの？」という疑問は、それとは別に考えなければならぬ大事な問題です。実際、そういう問題があるからこそ、正しさを主張する者同士が自分たちの「権利」を争っているのですから。また「正しいことは実現されるべきである」という信念が、暴力を正当化するという危険もあります。ですから、**理想主義**は、なんらかの形で相対化されなければなりません。そのうえで、**理念**や**正義**といったものの一切を否定するシニシズムにも陥らないようにする、というバランスが求められるのだと思います。

3 「おおよそ人ときへ名あれば、富めるも貧しきも強きも弱きも、人民も政府も、その権義において異なるなし」とのことは、第二編に記せり。(二編にある権理通義の四字を略して、ここにはただ権義と記したり。いづれも英語の「ライツ」といふ字に当たる。)(『学問のすゝめ』講談社学術文庫 44頁)

4 『学問のすゝめ』15頁。

古書献本のお願い

たいへん申し訳ございませんが、送料をご負担いただけるとありがたいです。(受付できないものもありますので事前にお知らせください。)



百科事典・辞書・開封済みのCD・DVD・月刊誌・週刊誌、自分史・教会の記念誌などは受け付けておりません

【献本をお願いしたい本の種類】

- 1 キリスト教書、キリスト教に関連した本(多少、書き込み等があっても、大丈夫です)
- 2 哲学、心理学等、人の生き方に関する本
- 3 社会の中で起きている問題を扱った本
- 4 暮らし(料理、健康、経済等)にかかわる本
- 5 小説(人の暮らし、尊厳、生き方を表現したものであればジャンルを問いません)
- 6 漫画(人の暮らし、尊厳、生き方を表現したものであればジャンルを問いません)

【本の送り先】

住所：〒607-8216 京都市山科区勤修寺東出町75 からしだね館
宛先：CLC からしだね書店 献本係 電話：075-574-1001 FAX：075-574-0025
Mail：clc@karashidane.or.jp

【本と一緒に以下の内容を記入したメモをお願いします】

①献本者のお名前②ご住所③お電話番号④メールアドレス⑤さしつかえなければ、献本者の簡単なプロフィールをお願いします。

【献本感謝】

深谷純一様、元森敦子様(順不同)

1月の古書の収益は40,370円でした。

【古本の売上を含むCLCからしだね書店の収益は、書店で働く障がい者の工賃になります】
献本くださった方のお名前を書店便りにご紹介させていただきたいと思ひます。匿名ご希望の方は、お知らせください。ご寄贈いただいた皆様、ありがとうございました。

編集後記

◆厳しい寒さが続いています。雪害の被害にあった地方の皆様には、心よりお見舞いいたします。雪かきや雪下ろしでお年寄りが大げがをしたり、亡くなったりというニュースに接するたびに、胸が痛むと同時に、ますます高齢化する私達の国、日本の今後をどうするのか？後ろ向きにではなく、前向きに考えたいと願ひます。◆書店のリサイクル本のコーナーは、あまり知られていないかもしれませんが、ある方々にとっては「宝の山」なんだそうです。絶版になったけれど、欲しかった良書を見つけ出すことができたという声も聞きます。古書として一冊ずつ登録はしていますが、やはりリサイクル本の棚の中から、ほしい一冊を見つけ出したり、貴重な一冊を思いがけず発見することの楽しみを味わっていただけたらと思ひます。【店長】

編集・発行：社会福祉法人ミッションからしだね
就労継続支援B型事業所からしだねワークス
CLCからしだね書店&カフェ・トライアングル

〒607-8216 京都市山科区勤修寺東出町75 からしだね館
書店電話番号 075-574-1001 FAX 075-574-0025
書店メール clc@karashidane.or.jp



CLCからしだね書店便りのバックナンバーはこちらから